
モブ子がゆく。

蜂亀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モブ子がゆく。

【Nコード】

N3060Z

【作者名】

蜂亀

【あらすじ】

——冬木市に溢れる虎柄の奇妙なアイテムグッズ、突き刺さる名も無きモブ達からの悪意ある視線。ああ、早く帰りたい。それだつてのに一番の敵はこちらを期待のオーラぶんぶんで見つめる(?)煌めく魔術礼装カレイドステッキ。 ■世界や同じモブからも嫌われ、現実からも弾かれ”あまり”になつた少女の願いは聖杯へと届くのか…? ■注意：タイころの明るさ目一杯のつもりでどんより暗く沈んだ成分が大量に含まれています。そして時々原作キャラクターが空気になったりキャラ崩壊したりします。表舞台に上が

らないキャラがときどきどこかで聞いたことある名前として登場しますが本当に同じ人なのかは作中でご確認ください。なおこのあらすじは時々変わります。

登場しない娘の二日間（前書き）

御アクセスいただき誠にありがとうございます。

一時創作どうしたんだといわれますと、そちらの息抜きで書いてたら
ヒートアップしてしまいました。誠にすみません。

相変わらず二次をやっても堅物文章ですね。

何とかならない物かしら（´・ω・`）

登場しない娘の二日間

「衛宮くんはモテモテなんですねー」

「急にどうしたんだよ突鎧（とつがい）。」

「いえ、ただなんとなく言ってみたかったですよー」

その日穂群原学園の校庭隅で衛宮士郎は一年二年合同の体育授業で組んだ相手の女子、

突鎧天利（とつがいあまり）といた。

確か二年B組の子だと思うが、あんまり彼女のことは知らないのでも今までもほとんど会話

もしたことがない同じ学年の顔見知りの人間だろう。

「衛宮くん。」

「ああ、何だ？」

「ごめんなさいね。せっかく一緒に組んだのに文字通り足を引っぱってしまつて。」

「いいんだよ。あれは突鎧のせいじゃないだろ？」

突鎧という女子と組んだ士郎は体育授業で協力しながら学校でやっていいのかわからない

謎の授業で二人三脚やら高飛びやらバドミントンダブルス戦など与其他の参加者達と競い合った。

主人公補正やら我慢強さやらそういう物を持ち合わせている士郎な

ら戸惑いはあれどこなせる競技だが、

生憎今日のパートナーは普通のお嬢さんだ。

テスト中に幾度となく降りかかる火の粉（士郎に敵対心を燃やすどころの誰かさんとか

組めなかったから悔しさとかそんな）を振り払うのは普通の人には至難の業であり

（というか巻き込まれて離脱するのが普通）、

一時休憩が終わった後のバトンリレーで突鎧が盛大にずっこけて士郎の足を引っ張り

共倒れしてしまった。そのとき突鎧から鈍い音が聞こえたのは間違いはなかったと

その現場を間近で目撃した匿名希望のワカメは言う。

「……。」

「と、とりあえず、応急処置はさ保健の先生がやってくれたしさ、そう気を病むなよ。」

「そうですねそういうことにはしておきますよー」

しよんぼりしたのか口をつぐむ突鎧に士郎はつい元気づけようと笑うと、突鎧も

含みのある言い方ではあれど、笑みを返した。

さて、そろそろこの二学年合同体育授業も終了時間に近づいて結果発表となった

ところで休む二人に近づく生徒が現れた。

「衛宮！」

「一成？」

士郎は名前を呼ばれたのでそちらに視線を向けるとその相手は少し汗を掻いて立っていた

彼は士郎の友人である穂群原学園の生徒会長柳同一成その人だった。

「テストの結果発表だろ？なんでこっちに？」

「ああ、すまない。先生がお前を呼んでこいと言っのでなここへ来た次第だ。」

なんでも、授業結果のトップにお前が含まれてるそうだ。」

「へえー衛宮くんやつぱりすごいですねー」

一成に腕を引かれて立ち上がった士郎は感心した声を上げた突鎧の方を振り返ると、彼女の

目線とぶつかった。突鎧はにこにこしたままだがその顔には「生徒会長と行かないのですか？」と

浮かんでいるように見えたのは気のせいか。

「や、すまないな突鎧。君もいたんだっただな。」

「なあ一成、突鎧の怪我のこともあるしさ――」

「いいんですよー。わたしのことなんて。」

士郎の目線を追ってやっと同行者の存在に気がついた一成は、ばつ

が悪そうに謝罪する。

わざわざこちらに自分が来たのは怪我人について行った士郎を呼びにだと思い出したからだ。

そうすると怪我人を放置できない士郎は一成に放っておけないと言おうとして口を開くとまるで遮るような発言が割り込んだのでその相手を見た。

振り向いた彼女はにこにこした笑顔のまま。

「ほら、せっかく呼ばれたんだから行かなきゃ駄目ですよー衛宮くん。」

「いや、そんなこと出来るわけ」

「いいんですよー衛宮くんは先生に呼ばれているんでしょう？じゃあ早く行かないと怒られます。」

笑顔を崩さず彼女は言う。声を掛けられた一成は「すまん。」と突鎧に頭（こつべ）を垂れた。

しかし二人に挟まれた士郎は納得がいかない顔だったが、

「…納得いかなさそうなので、言い方を変えますねー。衛宮くん、お願いします。」

先生きつと待つてると思いますし。」

有無を言わせない某あかいあくまの笑顔とも儚げな微笑みをたたえる某一年生とも、

はたまた嬉しそうに食事を食べる自宅でお留守番している同居人の笑顔とも違う

普通の笑顔に士郎は”お願い”されてしまったのでこちらに来てくれた一成に促されて

体育の先生と学年のみんなの元へ走っていった。

「所詮わたしのことなんていいのです。」

遠くへ行く二人の背中を眺めて突鎧天利はその先の彼方へ呟いた。
ひとつひとつの言葉を噛みしめるように、繰り返す。

「わたしはただの登場もしない人間ですから、わたしのことなんていいのです。」

自分の隣には誰もいない校庭の片隅で。

登場しない娘の二日間（後書き）

あくまでも女オリジナル主人公の突鎧さんは舞台上には上がりたくないようです。

キーワードのシリアルは「シリアス＋コミカル」の方程式（？）で成り立ってるんだと

勝手に解釈して使ってますのでご了承ください。

登場しない娘の二日間2（前書き）

先に謝ります。

F a t eキャラが空気である

穂群原学園2年B組が名も無きモブキャラたちの巣窟に。

登場しない娘の二日間2

【ジャプニカ異録日記帳：始】

拝啓、おとうさま、おかあさま、

わたしの大事な破天荒なおにいさま、小憎たらくも愛しいいもうとへ。

日々の生活はどうですか？お変わり有りませんか？

わたしがいなくなってしまってからどんなことをしていますか？

突然一人でこちらへ来てからわたしは不安でしやうがないのですが、おじいさまとおばあさまの好意で通わせていただいている学園での日々を暮らしています。

今日はちよつと大変な体育のテストがあり、わたしの失態で足を挫いてしまいました。

でもそれ以外は変わらない生活で、……わたしは早く皆がいる家に帰りたいです。

どうしてわたしはこのような場所に飛ばされたのでしょうか？

未だに謎が謎を呼ぶあのときがわたしには忘れられません。

もしもあのとき飛ばされた時間がその場で止まっていれば皆心配しなくてよいのですが。

とにかく何事もないよう、わたしは心から皆さまの無事を祈ります。

【ジャプニカ異録日記帳：終】

突然だが、

【突鎧天利は名前は文字がなんか普通じゃないが、ただ名前を与えられただけのモブキャラクターである。】

と彼女自身常々考えている。何故そう思うのかといえば、彼女はこの穂群原学園が

ゲームの中に存在する架空の場所でその学園が存在するこの冬木市だつてやはり架空都市だと。

突鎧天利いや冬木市に飛ばされる前は家族に「天ちゃん」と呼ばれていた少女は覚えている。

なんてつたつてこんな場所に来る前の彼女はこの世界の元となるゲームを遊んでいたのだから。

「とりあえずクリアーして寝たら公園にいましたーですよ。どういうことですかこれは。」

思い出すだけでも理解不能なその出来事。

Fate/stay night（PS2版）を緩い速度でクリアしてやったー終わったーと布団にダイブ。

そして身体を揺さぶられてなんだと目を開けると、心配そうな顔でこちらを見下ろす見知らぬ老夫婦がいて、

彼女自身は冬の服装で公園ベンチで寝ていた。確か、布団にダイブしたときは黄色い

パジャマと青のナイトキャップを身につけていたのだが、それは背

負っていたリュックの
中に綺麗に畳まれて入っていた。

「わたしはチキンですからR指定とか恥ずかしくてーできないから
P S 2 版買ったんですよ…！」

”こちら”に來たときのことを思い出しているのか天利は拳を握りしめる。

自分の信念？というか融通の利かなさに引つかかってしまったその
ゲームが悪いとは

思っていない彼女だがその性格が駄目だったなんて言われたら日には
多分…いや絶対に彼女はしょげかえる自信すらある。

「はあ…今さら考えたって仕方ないですね…」

とにもかくにも、この突鎧天利は現実からゲームの中の名前の付いた
モブキャラとして

F a t e / s t a y n i g h t の中に…いや、

自分が知っているゲームよりも殺伐とした空気も、どこか恐ろしい
存在も

モブキャラクターだから分らないのかもしれないが学園に通う日
々に何ら違和感はない。

強いて言えば生徒の持ち物に、少々センスの悪い虎柄のアイテムが
そこかしこにあったり、

学園の道すがらやはりどこか虎っぽい何かがある…それくらいか。

（まだ遊んだことない、けど、タイころみたいな世界なのかしら。）

自分以外は誰もいない部屋で天利は悩んだ。考えの中で思い出される某ゲームタイトルには

わりとおもしろおかしく話が進むというたい文句があったはずで、なんとなくそれっぽい。

実はこう悩むまでもに何度か冬木市から抜けだそうという時もあったが、

大体いつのまにかそれが出来なくなっているんだから原作知識でいうところの大きな結界

が彼女の行く手を阻んでいるんだろう。

ただの名も無き一般人だったら苦もなく抜けだしてただろうが。

「名前が無くて冬木から逃げようなんて考えたら余計逃げられないんでしょうね…」

考えているだけでは溜まっていくストレスをどこかに逃がしたくな
った彼女は

重苦しいため息をまた一つはき出した。

ふと部屋の時計を見るともうすぐ深夜二時だ。このまま起きている
のは不味い。

不満はいつまでも胸の中に残って息苦しいが天利はささっと着替え
てやっと眠り慣れた

ベッドに身を沈めた。

穂群原学園2年B組教室前

「ごめんなさい、突鎧さんは今日来てるかしら？」

「あら、遠坂さん。突鎧さんなら昨日の怪我で今日はお休みしてま
すよ。」

「そうなの？残念ね。」

翌日の昼。案の定夜更かししたせいで突鎧天利はそのまま学校を休
む羽目に。

そんな事人に聞かねば知らない2年A組の教室から抜け出して天利
を見に来た遠坂凜は
残念だなと肩を竦ませてB組の教室を後にするしかなかった。

彼女は何のために、突鎧天利に会いに来たのだろうかと呼び止めら
れたB組の女子生徒は

訝しむが、きつと”遠坂さんに失礼なことでもしたんだわ”なんて
いう考えに至り、記憶から

そんな出来事を忘れ去ったなんて凜や昨日の面子が知ったらどう思
うだろう？

けれどB組は同じ事があれば十回あれば十人が十人同じ事をする。

A組C組それぞれのクラスメートは仲がいいというのに、何故かB組は突鎧天利だけを

除いてまことに他人へ対して冷たい教室だった。

登場しない娘の二日間2（後書き）

次回は突鎧さん家の老夫婦が登場します。

オリジナル陣営の最初の他作品登場人物名パロディ被害者だったりします。

登場しない娘の二日間³（前書き）

今回もFateキャラが空気です。

マジカルルビーちゃんが強化？されて帰ってきました。

登場しない娘の二日間³

キンコーン カンコーン

凜が2年B組を訪れた日の夕暮れ、またB組に訪問者が現れた。

「なあ、突鎧とかまだいるか？」

「ん？あまりは今日休みだぜ。」

「そうか。悪い邪魔したな。」

今度は穂群原のブラウニーこと衛宮士郎だった。B組に残っていた数人が揃ってため息をつく。

士郎はそんな彼らに首をかしげるが、それ以上の用は無かったので素直に帰ろうと踵を返して

「なんで”あまりもの”のあいっにお呼びがかかるんだ？」

「シラネ。どうせ昨日気を引きたくて怪我をしたってところがお人好しの餌になったんだろ」

「あーそれっぽーい！ホントむかつくよね。何様のつもりなのかしらあの余りは」

「”ナマエ”があるだけでもむかつくのになー。」

そんな話を耳に挟んだ。身体の向きを変える前にちらりと教室の中を盗み見る。

教室には数人の生徒がまばらにいて、教室のどこかで固まって話しているそぶりはなかった。

衛宮家居間

「…ということがあったんだ。」

「私にはよくはわかりませんが、随分と棘のある話をしているんですね。シロウの学校は。」

「いや、Cの奴もAの奴もBみたいに殺伐としてるわけじゃ…」

学園から帰ってきた士郎を迎えたのは腹を空かせた同居人こと聖杯戦争で士郎の

サーヴァントとしてコンピを組んだセイバーだ。今のところ、解決していないこと

（不屈の闘志で復活したはた迷惑な虎聖杯のこと）があり彼女は今の現代にその身を置き続けている。

「ふむ。なかなか難しいものですね。」

「ああ、本当にな。」

セイバーはシロウの話に耳を傾けながら茶菓子を摘み、シロウはのどが渴いたので煎茶を

淹れて一口啜る。そのお茶は普段より幾分安い煎茶だけどなかなかおいしかった。

そしてお茶に和むとなぜだか昨日ずっとこけた突鎧天利の事を思い出すシロウ。

でもお茶を飲んだら不思議と突鎧のことは忘れていた。

ところ変わってそして時間が巻き戻って丁度十二時ごろの突鎧家

「おばあさま、コレは一体なんですか？」

「ああこれはね、あの人が骨董品店で買ってきた杖だったと思うわ。」

「杖、ですか。」

「そうね。たぶん杖だと思うわ。」

なにぶん、夫の趣味は私には分かりませんでしたからねえ。

と微笑むおばあさまの声がその時はすごく遠くから聞こえてくる気がしました。

天利が目を覚ました頃にはすでに昼を回っていて、痛む足を庇いながらも慌てて

自室から降りてくると居間でランチタイムを楽しむお年を召した老婦人がいた。

その人は、天利を保護してくれた血の繋がらない彼女の祖母突鎧清音（きよね）

「清音おばあさま、おはようございます。」

「あら、おはよう天利ちゃん。怪我の具合は大丈夫？」

「まだちょっと…」

「あらあら。それなのに無理して降りてきてしまったのかしら？駄目ですよ無理をしては。」

治るものも治りませんよ？と窘める祖母に素直に謝る天利はふといつも祖母と仲良く

一緒にいるはずの祖父の姿が見当たらないので首をかしげた。

「あれ？天地（あまち）おじいさまは何処へ？」

「天地さんなら丁度一時間前ほどに新都の骨董屋に品物をとりに出かけましたよ。」

「また珍しい物でも見つけたんでしょうか？」

「そうかもしれないね、あの人が持ち帰るものはいつも不思議でいっぱいなんですものね。」

怒った様子もなく、ただ思い出し笑いをする血の繋がらない祖母に昔見たSFアニメの

宇宙警察（キャラクターは若かった）を幻視した。でも一応ここはFateっぽい世界だから

そんなものは無いと思いたい天利はすぐさまその幻視を振り払いキツチンへ足を運ぶ。

そして彼女は布にくるまれた少々ゴツゴツした棒状の何かを見つけ、手に取った。

「おばあさま、コレは一体なんですか？」

「多分、杖だったと思うわ。私にはあんまり詳しく分からないけど。」

「いいえ！私はただの杖ではありません！宇宙の平和を乱すため、いえ！守るため」

愛と正義の使者を捜し出しておもしろおかしく、いや、皆が皆平和に暮らせるように！」

棒状の何かから発せられる台詞。これは手に持つと勝手にしゃべり出す不良品のおもちゃなのかと天利は思うが、突然もぞもぞと棒状の何かは布から這い出して

『私はこの　へと降臨したマジカルルビーちゃんEXです！一緒に世界を守るため、魔女っ娘因子を持つ人たちを探しにいきましょう！選ばれた戦士よ！』

キラキラ光る謎のオーラでおもちゃっぽい何かが表情豊かに動き出した。

(……なんか　っていつてるなにあれこわい。)

なんか杖？なのにドヤ顔してるように胸を張ってるっぽいポーズのマジカルルビーちゃんEXに

天利の危険信号は大音量で彼女の頭に響いた。

「最近のおもちゃはすごいよねえ？」

「清音おばあさま、あれおもちゃって言ったら他のおもちゃ全部不思議なアイテムですよ。」

「あらそうなの？」

「というかあんなの、ここにあるのがおかしいくらいです……！」

突然のことにただただのんびりとあんまり驚いてなさそうな祖母に天利はコレは危険だと

諭してみるが、相手の反応は曖昧で、自分一人でこの変異を対処するのかと天利は一人
絶望しているなんて祖母の清音は分かっているだろう。

『さあ！私を手にとってください世界の余りっ娘さん！』
「！？」

午後の日差しが少し傾いた頃、突鎧天利の住む家で強い魔力が爆発し3度目の復活を果たしたどこかにある虎聖杯がよりいっそう虎柄を輝かせて

主要人物の知らぬ間に第三回虎聖杯戦争が始まっていた。

なんて、一番早く知るはずだった藤村女史が弟子のロリブルマとそれを知るのは
まだ先の話。

in魔法少女っぽいBGM

『次回！イヤよイヤよも好きのうち！諦めてください余りっ娘さん！一緒にハジけて

さっぱりしちゃいましょう！』

「何でわたしなんですか！？原作にいないわたしじゃなくて、現役カレイドルビーさん

捕まえてくればいいじゃないですか！？」

『それはそれでいいけどやっぱり3度目は別のスタートから始まらないとおもしろみがないでしょう！？』

「いやです！わたしは、モブからはみ出したいくないんですー！！」
『なにをいまさら（笑）』

追いかける魔法の杖、逃げる自称モブ子のシュールな追いかけつこで始まる物語。

さあ賽は投げられた。

聖杯を手に入れんとする者たちよ、
これは今魔法も神秘も関係あらず、
どんな者でも参加できる。

願いを叶えたきものはこそって参加せよ。

ここに第三次異回虎聖杯戦争を開催する！

out魔法少女っぽいBGMが消えた頃どこかの大型掲示板サイトに誰かの書き込みがあった
とか何とか。

登場しない娘の二日間³（後書き）

とりあえず最後は精一杯かつこよくがんばったつもり、です

目撃した娘達の大禍時（前書き）

突鎧さんは冒頭部分だけ登場します。

目撃した娘達の大禍時

「魔力の塊が、目の前を横切ったんだあれもしかしく「じゃんけん死ねえ！」へぶあっ!？」

「見えない存在感のある何かが、猛スピードで商店街を通過した。」
「その先を今にも泣きそうな顔の女の子が必死で走っていったよ。」

それは異変を感じた人間がそれとなくその現場周辺を聞き込みに戻ったときの話。

一部一般人とは別な事を話す相手はその人間にシメられていたのはきつと気のせい。

突鎧家で起こった異変に天利は痛む足に鞭打って（にしては随分と元気そうだった）

自宅にいる祖母を巻き込まないためにもどこか遠くへ走り去っていく。

その後を『お待ちください新しい魔女っ娘さーん!』と魔術師なら確認できる杖が一般人

でもなんか通ったと分かる程度の存在感を醸し出しながら飛んでいく。もはや一般人の

目に触れてはいけないタブーなんて存在しないかのように神秘は弾丸となって天利を追いかけ、

その追いかけてこをさらに追うように夕暮れが街を包み始めた。

突鎧家の自宅で異変が起きた頃

穂群原学園弓道部前

あれから、遠坂凜は特に何か変わることもなく放課後まで学校にいた。

そして気がつくと、弓道部まで彼女は足を運んでいて自覚もなしにここへきてばーっと

していた彼女は程なくしてこの弓道部の部長美綴綾子に見つかった。

「あれー？遠坂。どーしたの今日は弓道部休みだよ。」

「こんにちは美綴さん。…今日はどこもお休みなのね。」

「ん？なーにそれ。気になる言い方するね。」

「別にたいしたことじゃないの。」

話に食い下がってきた美綴に凜は手をひらひらさせて適当にごまかした。

それでもおしえろーおしえろーと繰り返す美綴に鬱陶しそうにその綺麗な眉を顰めた凜は

こちらを”視ている誰か”に気がついた。

(……？)

相手はこちらが向こうの存在に気がついたというのに、逃げることも引くこともなく

ただ凜一人を視ている。向こうから感じるのは敵意などではなく、何故か羨望の眼差し。

「ん、遠坂？」

「あつ…ごめんなさい何でもないわ。ただちょっと誰かに見られてた気がして。」

「あはは。なんだそんなことか何を今さらいつてんのさアンタは、学園で知らない奴はいないアイドルでしょーが。…理由はともあれ」

最後の台詞は凜には聞き捨てならないものだったがそこは敢えて無視して「それもそうね」とだけ返した。

美綴の言う理由はこの前のアレしかない。忘れもしないというか冬木市民全員の記憶に残っているのが

心底我慢出来ない問題のアレ…年齢を考えたって恥ずかしい平行世界の自分と戦った認めたくない自分自身ことカレイドルビー……。

「正直アレのせいで穂群学園アイドル地位をさらに加速させたよーなもんよねー遠坂は。」

「う、うるさい！そんなの言われなくても分かってるわよ！？というかさつき自重したのになんでわざわざ

言い直すのよ！？」

「猫かぶりする遠坂の化けの皮が剥がれる瞬間が見たいから。に決まってるでしょー？」

美綴の台詞に見事にペろりと猫から鬼へ変貌した凜の様子を美綴はしてやったりとニンマリ笑い、

分かってもつい反応してしまった凜はうがー！と怒った。このどうみても女子同士のじゃれ合いを目撃した運のいい人奴はこう語る。

「凜ちゃんprprwww」

「マジモン見られて幸せでしたwww」

「神様ありがとう俺たち名無しだけど今最高に幸せです！www」

……とりあえずまた穂群学園一のアイドル遠坂凜のファンが増えた

らしい。もう視線を感じない凜は
息を切りながら見送る美綴に適当に挨拶をして家に帰るため、正門
へ足を運んだが…

「何よこの騒ぎは。」

わらわらと穂群原学園の正門は生徒先生の隔てなく集まった人々で
外へ出られなかった。

何度も人の垣根を越えて行こうとしても、人々は行く手を阻む。わ
いわいがやがや。

彼らは何故こんなところで立ち止まっているのだろうか？

「……。どう言ってもどきそうにないわね……。」

押しても引いてもわいわいがやがやびくともしない群衆に頭を痛め
る凜は

「あ、ね…遠坂先輩。」

同じように立ち往生している一年生…自分の妹に。とはいえ学園に
いるときは二人は

遠坂家と間桐家に分かれて生活してはいるけれど。

「あれ？桜じゃない。今日は衛宮君と一緒にじゃないの？」

「いえ、今日は弓道部に寄っていたので、先輩とは別行動なんです。」

「ふうん。そうなの。じゃあ衛宮君が帰るまではここに人だかりは
出来てなかった事かしら。」

「ええ。陸上部の人とかがいたくらいです。」
「そっか。」

どうやら桜は約30分くらいは立ち往生していたようだった。

「ねえ桜。」

「なんですか？」

「ちよつとあつちで話しない？」

少し考えた後、凜は桜を誘って二人は人混みから離れ校庭と通学路を隔てるフェンスまで移動し、
人混みが無くなるまでの間姉妹の会話を楽しんだ。

わいわい、がやがや

「——人混みなかなか散らないわね。」

「——…そうですね。」

一時間くらいたったか。正門に集まった人々は未だに減るところか
一人二人と増えているような気がしてならない。

なんの集団なのかとか、早く帰りたいと思う二人のイライラは募る
ばかり。

正門に行けないのなら弓道部の裏門へ行けばとは普通考えつくのだが、
正門の光景に二人は目を離さない。

そろそろ時計は16時40分を指して暗くなってきた。

「だめ。もう我慢出来ないわ。」

「え？姉さん何をするつもりですか？」

「決まってるでしょ！あそこにいる奴ら吹っ飛ばしてくる！」

「ええっ！」

いい加減我慢の限界に来た凜は立ち上がり自分の鞆を桜に預けて人混みへと駆けていく。

桜の静止も聞かずに、だ。その背中をただ送った桜には酷く気持ちの悪い違和感を人混みに感じて

「ちょっとそこ！通行の邪魔だからどいてくれないかし」

凜が人混みの一番外側にいる人間の肩に手を掛けた瞬間、その違和感的中したのを知り叫んだ。

「だ、だめ！姉さん危ない！」

「へ？」

酷くまぬけな反応をする凜の目の前で、正門の近くに集まっていた人間がすべてぐずりと崩れて消えた。

あかい、あかい、人の形を残さず塊になって、どろりと溶けて跡形もなく。

一時間も前は人間を触ってもびくともしなかったのに、音もなく彼らは凜の手のひらに

あかいものをひとかけら、それだけ残して消えさった。

目撃した娘達の大禍時（後書き）

お話の設定で遠坂間桐間の姉妹の仲は普通となっています。
恋愛面での関係もわりと普通です。

ちょっと修正入れました。

目撃したサーヴァントの大禍時（前書き）

今回の遠坂さんと間桐さんのお嬢さんの出番は冒頭部分だけになります。

やっとサーヴァントの一人が真面目（？）にお話に関わり出しました。

2011/12/15ちょっと修正しました。

目撃したサーヴァントの大禍時

「——ッ!？」

凜の手のひらに残ったひとかけらのあかいそれは、凜が本能で手のひらの異物を振り払う前に、凜の目の前でまた離散して消えた。

思わず口元をかけらに触れていない手で凜は塞いで息も止めた。彼女には離散したあのかけらはまだ近くにあると察知し彼女はそれを体内に

入れてはいけない思ったようだが、

残念ながらそれはもう遅かった。

「——ぐっぐふっ!？」

「姉さん!？」

桜が見ているその目の前で、遠坂凜は血を吐いた。二人の娘以外に誰か冷静な判断を下せる者がいたならば、

穂群原学園の景色は夕暮れから夜へと変わる瞬間のままそこだけ時間が切り取られたかのように止まっていることに気がついただろう。

遠坂凜が大変なことになってる頃の冬木公園

『むむっ!ピコーンと私、来ちゃいましたよ!大変です!あなたの先輩ことカレイドルビーさんの大ピンチですよマジカルモブ子さん

！』

「誰がマジカルモブ子ですか！？」

『それは今私を手についたあなたに決まってるじゃないですか！ほら冗談言ってる場合じゃなくホントに

やばいです！カレイドルビーさんの危険が危ない！』

必死で走って逃げてきた突鎧天利の怪我をした足はもう限界で、冬木市のあの殺風景な公園でマジカルルビーEXとの逃走劇は幕を下ろしたが…

「おい」

「なんですかそれ！？というかですわわたしはまだ魔女っこだかなんだかになるつもりは無くてですね！？」

『イヤよイヤよも好きのうちでしょう？こうしてる間にもカレイドルビーさんの生命線が何度も言いますがやばいんですってば！それこそ私のおもちや、

いや大事な相棒さんがここで消えてしまうのは実際困るんですよ！』

「あなたは、楽しんでるだけでしょう！？」

「なあちよつと」

人の寄りつかない冬木公園で天利とマジカルルビーEXはそれはもう冬木公園のど真ん中で人目をはばからずぎゃあぎゃああつるさく騒ぐ。

おかげで自分達のところに人が来るとか思っていなかった為に天利は目の前の喋る杖に杖がどんな存在であるか分かってる口ぶりで対応してしまい、

「ちよつと君たち。」

『「なんですか！？」』

「話があるんだが時間はあるかね？」

声を掛けられて我を忘れて第三者の方へぐりと首を回してその相手が怒気オーラで一般人にはいつも以上に威圧感マシにマシマシの色黒長身青年を見て泡を食った。彼は”一方的”にこちらが知っている遠坂凜の元サーヴァントで一般人じゃ敵わない。

（ああ、やばい。わたし、ここで死ぬ。）

彼の表情は何故か彼が身につけているサングラスで分からないが、その背後からにじみ出るオーラがモブから名を持つモブに変わった彼女を疎ませていた。名前があつたところで一般人には変わらない彼女に、特別な力など元から持ち合わせていないのだから仕方がないのだこればかりは。

きつと彼がためらいもなくその腕を振れば、彼女は冬木市から死ぬことにより離脱できる。ある意味そのまま帰ることが出来るかもしれない…

どこかの漫画で登場した架空ゲームのように、”死んだ状態のまま自宅に帰る”ことになるかもしれないけれど。

身体は疎んだままなのにそんな考えが天利の頭に浮かぶのだから自分も随分他人事のように自身の命を考えるんだな―と天利は冷静だった。

side：アーチャー

(……なんでさ。)

人知れず心の中でアーチャーは独りごちる。

彼は今現在の状況に苛ついていた。相棒として改めて手を組んだ遠坂凜からの連絡が一切途絶えたからでもあるし、

彼の目でとらえたもう存在しないはずの諸悪の根源である杖が、一般人っぽい相手を剛速球で追いかけているもんだから何事かと後を追ってみれば

『あなたの先輩ことカレイドルビーさんが大ピンチですよマジカルモブ子さん！』

「誰がマジカルモブ子ですか!？」

ネコミミ騒動で凜から聞いていた話じゃ暫くこの世界には出てこないという話だったマジカルルビーとそのルビーの実態を知っているかの様に話す

見知らぬ娘。ルビーからはマジカルモブ子やらなんやら親しく呼ばれて(？)いるのだから、

彼女がなにか凜について知っているのではないかと声を掛けたが1度目はスルーされた。

『カレイドルビーさんの生命線が本気でやばいんですってば!』

「あなたは、楽しんでるだけでしょ!？」

「なあちよつと。」

まあそんなことをいちいち気にしないアーチャーはスルーされた理由がもしかしたら距離が遠かったのかもしれない。

と考えて2度目は少し近づいて声を掛けるが、やはり娘もルビーも口論に夢中。

というか今ルビーの方が聞き捨てならないことを言わなかったか？
イライラと心配ごとが増えたアーチャーは八つ当たりだと知っていたながら、3度目にして娘にかなり近づいて怒気を孕んだ声色で話しかけた。

そしてようやくと返ってきた反応後、娘は蛇に睨まれた蛙のように動きを止めてウンともスンとも言わなくなってしまった。
うつすら青ざめているのはやはり何か知っているのか？そう思うとますますアーチャーの威圧感は強くなっていく。

『誰かと思えば黒シエロさんじゃないですか！お久しぶりです！』
「その名前で呼ばないでもらえるか。」

重い沈黙が続いたがそれを破ったのは娘と口論していたマジカルルビーだった。杖のくせに表情があるという謎仕様のゼルリッチ制作の魔術礼装に

アーチャーは警戒心と威圧感はむき出しのまま対応した。

『えーそんなー私とあなたの仲じゃないですかー』
「やかましい。それで？お前と彼女はどのような関係だ？」

そっけないアーチャーに不満そうなマジカルルビーEXはぶーたれてくるがそんなことには気にもとめず、
サングラス越しではあれど鋭い目でルビーを手に持ったまま動かな

い娘を射貫いた。

だがその途端

「うあっ…」

「なっ」

『あっ』

「うあーん」

娘の両目より大粒の涙がこぼれ落ち、彼女は泣き出してしまった。

「なんでさ…!?!」

つい口癖を言っただけで慌て出すアーチャー。だがサングラスつけた色黒長身男性に睨まれたら、普通の一般人は怯えてしまうわけだが…マジカルルビーEXと口論してる彼女が普通の一般人だと思わないままだったのだからそんなことアーチャーには分からなかったのだ。それよりも今一番の大事なことは凜の無事を知ることであるのだから。

『アーチャーさん！女の子を泣かすなんてどういっつもりですか！いくら面白おかしくをモットーとして持つ私でもこれはいただけませんよ！』

仕舞いにはマジカルルビーEXにまで説教されるアーチャーだった。

目撃したサーヴァントの大禍時（後書き）

モブ子こと突鎧さんに備わっているのは世界とモブ仲間から弾かれる余る性質

つまりは嫌われるという嬉しくない能力が付加されてるだけの何処にでも要る娘さんなのです。

漫画で出てきたゲームのところは狩人の「G・I」の事です。

目撃した学生の不思議な世界（前書き）

モブ子とアーチャーとルビーちゃんEXは冒頭出演。

ちよつとの間、ワカメが主人公なのでワカメが嫌いな人はご注意ください。

目撃した学生の不思議な世界

マウント深山商店街の道を泣き腫らした目をこすり歩く娘と渋々ながら楽な格好で歩く色黒白髪長身男性というコンビに商店街の人々は特に気にすることもなくいつも通りに商売を続けている。

side：アーチャー

「クツ…何故私がこんなことをしているんだ…」

『女の子を泣かせた人が何を言っているんですか？』

「言われずとも分かっている……。」

まさか、彼女が泣き出してしまうとは思っていなかった。…だが、それは私のミスだ。早合点して彼女を怯えさせてしまった。

ここに誰かがいたらあの杖と同じようなことを言われるだろう。

だが簡単に警戒を解くわけにもいかんだろうな…今現在彼女はあの杖となにやら話し込んではいるが…いくら一般人でもあの杖が勝手に

動いたりすることへ何か違和感を…むしろ驚いて気味悪がったりする物だが…。

『黒シエロさん！何してるんですかー？遅いですよー！それに私

たちとはぐれたら真相も闇の中だつて分かつてるんでしょう？
さあさあきびきび動いてくださいなー」

「ああ、分かっているとも。」

この前よりも騒がしくなっているあの杖がこちらをせかしてくる。
まったく。奴には人の都合など考える思考がないのだろうか。

『くーろーしえーろーさーっん』

「ええい、うるさい今行くと云っているだろうが！」

しつこく呼ぶマジカルビーEXに反応するアーチャーへなんとも
生暖かい視線が突き刺さっていたなんて本人が知ったらどう思うの
だろう…？

side out

穂群原学園

突鎧天利が休んだその日、誰よりも早く間桐慎二が天利に用があつたので2年B組を訪れていた。用と言っても別にたいしたことじゃない。

自分の目の前で盛大にずっこけて骨を痛め帰りなんて足を引きずっ

て自宅へ帰っていく様を彼はたまたま昨日見ただけだ。

（あんなフツの奴を気にするなんて僕も焼きが回ったかな。）

慎二にとっては他人を心配するなんて子犬を見つけて可愛がつてる
とき以外彼にはない。突鎧という2年B組の女が怪我をして今日は
休んだ

ということだつて聞いてみれば特に関心もなく、なんだかつまらな
くなって自分の教室に何とも言えない表情のまま入った。

朝のHRが終わって、彼にとっては眠たい授業が一つ終わってさて
次の授業は…と時計を見ると始まるまでに時間があるのを
確認したあと2年A組の教室へ。結果は

「え？遠坂さんは”今日はお休み”ですよ？」

「なんだい遠坂も休みか。」

「アンタがわざわざこっちのクラスに来るなんて珍しいね。…とい
うか遠坂に振られてまだめげないのかい？」

「朝から失礼な奴に説明する親切は悪いけど無いね。」

「蒔の字。朝から喧嘩はいただけない。」

2年A組で慎二を迎えたのは陸上部三人娘の三枝由紀香、蒔寺楓、
氷室鐘たちでとりあえず聞かれたことは親切に答える三枝と

噛みついてくる蒔寺、喧嘩腰の蒔寺を窘める氷室を見て慎二は相変
わらずだ。と思った。本編だろうとホロウだろうと……。

（まで。僕は何を考えているんだ？）

なにやら真っ黒いものに飲み込まれたり、日記を見たらその後の記
憶がなかったりという一体いつそんな体験をしたのか

わからない記憶に慎二は混乱した。

「…まあいいや。遠坂がいないなら僕にはここへの用なんて思い浮かばないしね。」

「そーだそーだ。さつさと自分のクラスにもどりやがれ」

「時の寺、相手が嫌いだからと言って、」

「何だよ、氷室だって」

慎二に噛みついてきた時の寺と何でも喧嘩腰になるなと寝る氷室のなんかこつち関係なさそうな喧嘩を尻目に慎二はさつさとA組の教室から離れた。女の喧嘩に首を突っ込むと酷い目に逢うのは大体男である、と慎二には身に染みている常識。

「やれやれ。まったく…ああいう喧嘩に首を突っ込むのは衛宮だけで十分だ。」

ふ、と前を向くとA組とC組の道をつなぐ廊下で三人の生徒が口論している。そろそろ二時間目が始まる時間だというのに、生徒達は慎二が見ているのにもかかわらず何かしらの口論でヒートアップ中。そのなかで聞こえてきた口論の内容は断片的で意味を解さないものだった。

「え！…！衛宮を…！…つも…！？」

「仕方な…！…の…では、衛宮士郎…！…！」

「…！…！…！…！…！なこと、か…は許さ…！…い！」

分かる言葉を慎二の解釈で最後まで並べると、「衛宮を■すのか？」

「仕方ない。衛宮士郎を■することはできない。」

「あいつを■るようなことは　が許さない。」本人のあずかり知らぬところでなにやら物騒な物言いである。

その内容になんとなくいらだちを覚えた慎二はそいつらの顔をよく見ようとして、

「あれ？慎二、もう授業始まるぞ。」

「！？」

Ｃ組から顔を出した衛宮士郎本人に腕を捕まれて我に返り、士郎の顔を見た。勢いよく首を回したので若干痛い思いをしたが今の慎二にはそんなことどうでもいい。

「ど、どうしたんだ？なんか顔が怖いぞ慎二。」

「……」

よほど睨み付けていたのか士郎からたじろぐ雰囲気が伝わる。一呼吸置いてからもう一度ぐりんつと擬音が鳴るくらいの勢いで首を回す慎二は先ほどまでそこに口論していた三人の生徒が、まるで最初からいなかったかのように姿を消していた。

慎二が見ていた事に気がついて、大慌てで廊下を走ったとしてもその足音が聞こえるはずなのに、まるで幻のように何もなかった。

「……なんだったんだ、あいつら。」

「え？」

「……なんでもない。」

そして授業開始の予鈴が鳴る。先生が入ってくる前に慎二と土郎は自分の席へ着席した。

目撃した学生の不思議な世界（後書き）

この世界時間軸はタグにもあるように平行世界なので、ホロウなどの学年による違いはご容赦ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3060z/>

モブ子がゆく。

2011年12月19日11時50分発行